

# シクラメン ハイビスカス 栽培と

## コーティングの導入

東京都中央農業改良  
普及所城北分室

半 田 保 之

### はじめに

東京都の花きは全国第9位の生産額(年間49億円)でその主体は区部, 三多摩の鉢物, 花木類および島しょの観葉植物である。なかでも鉢物は, 都市近郊という条件を生かし, 市場外流通(直売, 直卸)もかなりの比重を占めることもあって, 実際の生産額は統計数字をさらに上回るものと推定される。

中心地のひとつ城北地区練馬区, 板橋区では, 直売主体のシクラメンをはじめとする, 鉢物生産が盛んである。東京での古くからの産地は, 江戸川区の鹿骨や世田谷区などであるが, この城北地区の歴史は比較的新らし

産, ②施設の回転は極めて良い(4~5回転), ③シクラメンは直売が主体で, 高冷地育苗は少ない, ④ハボタン, パンジーなどの露地花きも多い, ⑤サツキなど花木生産も盛んなどであろう。

主要品目としては, シクラメン(20戸, 5万鉢), プリムラ類(28戸, 14万鉢), ベゴニア類(25戸12万鉢), ハイビスカス(10戸4万鉢), ボッサ菊(14戸7万鉢)で, これらがローテーションに組みこまれている。経営上の基幹はやはりシクラメンで, その他の品目は補助的なもので, 作業はシクラメンが常に優先している。

普及所では, シクラメンの栽培技術の安定と良品生産を, 重点課題として取り組んでおり, そのうち用土の規格化については, 生産者からの要望が多いにもかかわらず, 思うにまかせない実情にある。

それは, ①用土の原料がさまざまである, ②シクラメンの栽培期間が長い, ③シクラメンは最近の「F<sub>1</sub>」種を除き, 個体差が大ききなどによっている。

そこで視点を変え, 鉢がえの多いシクラメン栽培の省力化と, 合わせて栽培期間の短縮にも挑むため, 緩効性肥料による展示ほを, 53~55年にわたり設置した。

### (1) シクラメン(ボンファイヤー)の事例

東京都の施肥基準は表1のとおりで, 6号鉢生産の場合, 栽培期間約14カ月, 鉢替え(移植)は3~4回, その間, 追肥は多い場合は5回以上にもなり, 栽培労力は極めて多くかかる。一般には, マグアンプKなどの緩効性肥料と有機化成などの低度化成肥料, および過リン酸石灰, ようりんなどのリン酸肥料, および骨粉, 油カスなどの有機肥料を併用す

表1 シクラメン(6号鉢)の作型と施肥効果(東京都)

栽培型と主な作業		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	摘 要
栽培型		△ ○ ● □												・施設内
主な作業		追肥	鉢替え(45号鉢)・元肥	遮光 追肥	追肥	鉢定植(6号鉢)・元肥	播種	追肥	追肥・出荷	追肥・加温	移植・元肥		追肥(3号鉢)・移植(3号鉢)は鉢・元肥	

施肥基準(元肥-用土100(当りのグラム数), 追肥-移植土-育苗箱1箱(8c)当りのグラム数, その他-100鉢当りのグラム数)

用 土	移 植 土	鉢 上 土	鉢 替 土	鉢 定 植 土	備 考
肥料成分	元 肥	追 肥	元 肥	追 肥	元 肥
N	30~40	15~20	40~45	15~20	30~40
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	20~25	10~15	20~30	10~15	15~20
K <sub>2</sub> O	25~30	10~15	30~40	10~15	10~20
					追肥1 追肥2 元 肥 追肥1 追肥2
					20~25 20~25 35~40 20~30 20~30 20~25 20~25 25~30 20~25 20~25 25~30 25~30
					移植土の追肥として液肥を用いる場合は液肥成分(100(当りのグラム数)N-10 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> -4, K <sub>2</sub> O-8の500倍液を2~3回施用する。

く, ほぼ10~20年ていどの経験者が多く, また若い後継者たちが, 経営の主体となりつつある。そのため, 新しい技術の導入には積極的であるが, その一方で, 1戸当りの施設面積は600~1,000㎡ていどであり, また年間の栽培品目は15~20種類と多く, 各人の経営面での個性は強く, 共通する課題は比較的少ない。

この地区での鉢物経営の特徴をあげれば, ①多品目少量(1,000~2,000鉢)生

産する場合が多い。その配合割合はさまざまであるが, 現在は有機肥料施

表2 シクラメン(ボンファイヤー)に対するコーティング肥料の施用効果(練馬)

区 名	肥料名と施用量 (g/4.5号鉢)	成分量(g/4.5号鉢)			草 丈 (比)	最 大 葉 長 (比)	花 径 (比)	葉 色	備 考
		N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O					
①有機化成区	KH有機 6g(置肥)	0.30	0.30	0.30	22.8 <sup>cm</sup> (90)	7.9 <sup>cm</sup> (93)	11.0 <sup>cm</sup> (89)	+	肥料切れ
②ロング140区 用土混和	ロング140 2g + KH有機 1g	0.31	0.11	0.27	26.0 (103)	9.1 (107)	12.2 (99)	+++	
③ロング180区 用土混和	ロング180 2g + KH有機 1g	0.31	0.11	0.27	26.1 (103)	8.6 (101)	12.8 (104)	+++	
④ロング140区 鉢底施用	ロング140 2g + KH有機 1g	0.31	0.11	0.27	27.5 (121)	8.8 (104)	12.5 (102)	+++	
⑤慣行区	油カス 4g + 化成7号 2g(置肥)	(0.16)	(0.16)	(0.10)	25.3 (100)	8.5 (100)	12.3 (100)	++	

注) 播種:53年9月下旬, 仮植:54年1月下旬, 鉢上り(3号ポリ鉢):3月下旬, 定植(5号案號):6月20日(1区20鉢) 調査:11月27日, 用土:赤土5, 腐葉土3.5, ビートモス1.5(割合) 供試肥料成分:マグアンプK(6-40-6), ロング140, 180(13-3-11), 有機化成(8-8-8), ようりん(0-20-0)

用は減少し、単純化しつつある。53～54年の展示はの成績によると表2のよう、コーティング肥料ロング 140 施用区が、開花数その他、慣行施用区に比べてもすぐれた成績を示し、省力化の可能性をみきらかにした。

またこの地区のシクラメン生産は、従来のお歳暮用の6～8号鉢の大づくりから、新規需要の開拓の面より、実庭用としての大～中輪の4.5～5号鉢づくり、またミニシクラメンの3～4号鉢づくりへと、関心が転換しつつある。省エネの点からも、単位面積当りの売り上げを伸ばす必要があり、そのため、こうした小鉢づくりの技術開発が急がれる。

また、プラスチック鉢への移行も重要で、栽培労力の30%近くを占める灌水労力の削減と商品イメージの向上から、こざいいなプラ鉢の導入、拡大をすすめたい。

(2) ミニシクラメン(短期栽培)の事例

前述の省エネ、消費拡大の目的で、ミニシクラメンの新しい品種をドイツから導入し、短期省力栽培を試みた事例がある。これによると、移植は1～3回で、しかもプラスチック鉢の使用により、栽培労力は大幅に削減され、またコーティング肥料“ロング”の使用により、追肥なしの簡易栽培が可能となる。さらにプラスチックによる枯れ葉の減少、移植の省略による植え傷みの減少の結果、灰色かび病、萎凋病、軟腐病の主要病害が軽減されて、成品率の大幅アップが予測され、新時代のシクラメン栽培も近い感がある。

(ミニシクラメンの事例は、編集の都合上、特に筆者の諒承を得て掲載致しました。今後適当な機会に掲載する予定です。……係り)

(3) ハイビスカスの事例

ハイビスカスは、シクラメン→プリムラの後作として、数少ない夏季の花木鉢物である。とくに、48年頃にこの地区で開発された一わい化剤による品質向上技術により生産量は飛躍的にアップした。一般には、表3の作型で、4.5～5

号のプラ鉢で販売す  
ハイビスカスは吸肥性が大きく、濃度障害を受けやすい。そこで、挿し木箱で発根後に、コーティング肥料(100タイプ)を、置き肥として100本当たり5gていど施用し、ポット移植→定植について鉢底あるいは、用土混和(100→140タイプ、用土1ℓ当り3

～4g)すると成績が良い。従来は、特に定植後露地に出す7～9月販売の作型で、降雨のため溶脱が著しく、1～2回の追肥を余儀なくされたので、省力効果は大いに期待される。

(4) その他の事例

このほかコーティング肥料は、吸肥性の強いリーガールベゴニアや栽培期間の長いプリムラ類、また露地栽培のポッサ菊などでも好成績をあげており、普及性は高い。

今後の動き

残された課題としては、用土混和後の蒸気消毒による、成分の溶脱スピードの変化の把握、また定植後の期間の短いカルセオリアなど(販売まで70～80日)では従来の100タイプでは長いことなどがある。

また使用上注意すべき点は、140タイプ以上を用いて数回移植をおこなう場合、完全に溶脱しきっていない成分が加算され、濃度過多となった事例があり、安全な肥料とはいっても計画的な使用に努めたい。

ともかくコーティング肥料は、従来の緩効性肥料にない、溶出日数を計算できるユニークな特性を備えており、これを生かした栽培法を確立したいと考えている。

表3 ハイビスカスの主な作型(慣行)とコーティング肥料の施用効果(53年、練馬)

Table with 12 columns (months) and 2 rows (cultivation type and main work). Includes symbols for transplanting (P2), fertilizing (x), and other agricultural actions.

Table with 8 columns: Area Name, Fertilizer Name and Application Rate, Component Content (N, P2O5, K2O), Planting Density, Plant Height, Flowering Number, Flowering Rate, and Remarks. Rows include Mag Amp K, Long 140, Long 180, No Fertilizer, and Conventional.

注) 挿木: 54年9月上旬, 鉢上げ(2.5号ポリ鉢): 11月中旬, 定植(4.5号プラ鉢): 4月中旬, 調査: 8月28日  
供試肥料成分: KH有機(5-5-5); 化成7号(8-8-5) 品種: 黄色一重咲(中輪)